

本日の聖書箇所には、異国の地で囚われの身となっていたイスラエルの民が、故郷への帰還を神において望み見ている歌が綴られています。そんな苦しみと希望の狭間を生きる民が見据えていたのは、「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる」（5節）ということでした。これは単に、苦あれば楽ありといったような教訓ではありません。人が流す涙を無駄にはせず、人の喜びにつなげていく神のみ業が示されています。

よく、「歳のせい、涙腺が緩んでしまい、涙もろくなってきた」という言い方がなされます。もちろん、それは「歳」や「涙腺」のせいではありません。相手の痛みや苦しみ、喜びに深く共感できるだけの経験を積んできたという証です。手のしわや体の傷がその人の人生を物語るように、流される涙もまた、その人ならではの人生を物語ります。そして、その物語こそが、見えない形で相手に伝わり、相手を受けとめ、相手を包み、癒しと慰めを生み出しているのでしょう。相手の心に蒔かれた愛の種が、あなたの涙を水分として取り込み、芽を出し、喜びと慰めを実らせる、そんな神のつくりだす命の世界を詩篇が歌っているようにも感じます。

『植物はすごい』（田中修著、中央公論新書）によれば、植物の色も匂いも味も形も、またその変化も、すべてに意味があり、その環境で他者と共存していくための計算され尽くした仕組みであることが分かります。逆立ちしても人間にはできない、神秘とも言える潜在能力を植物が持っていることに驚かされました。植物の命に、神が秘められたものの「すごさ」を見るとき、同じ被造物である私たちの命にもまた、神が秘められた「すごさ」があることを思わされます。神が雨を降らせ、地を豊かにすることで、植物に備えられた本来の力を引き出しておられるように、私たちもまた、神が備えられるものによって、本来の命の輝きが引き出される存在であることを思うのです。私たちには、その心に抱えている痛み、悲しみから流される涙を通して、誰かの痛み、悲しみに寄り添うことができる、そんな力が、喜びが秘められています。それは、「ネゲブ（砂漠）に川の流れを導くかのように」（4節）、私たちの乾いた心を潤そうと、神が備えてくださった力であると感じずにはられません。

（文責：望月達朗牧師）

